1　平成16年度小教研道徳部会研究主題

豊かな心をもち，よりよい生き方を求める子どもをはぐくむ道徳教育
――― 体験を生かした心に響く道徳の時間 ―――

2　研究主題の趣旨

（1）研究主題設定の背景

これまで本県においては，総合単元的な道徳学習を中心とした実践が行われ，子どもたちが自らのよさを生かしたり，自己課題を追求したり，自らの思いや考えを生き生きと表現したりすることを通して，「生きる力」を育てる教育に取り組み，多大な成果を挙げることができた。

第16期中央教育審議会答申(1997)において，学校を人間教育の場，子どもたち一人一人の自分さがしの旅を扶ける場にしていくことが，これからの学校の大きな課題として示されている。つまり，社会の変化に主体的に対応できる，たくましく生きる力を子どもたちが身に付けることができるように，学校教育全体で取り組んでいくことが求められたのである。

そこで，平成13年度から，子どもたちがより一層主体的に「生きる力」を育てていくことができる道徳教育を目指して，研究主題を「豊かな心をもち，よりよい生き方を求める子どもをはぐくむ道徳教育」と設定して研究を進めてきた。そして，このような道徳教育のかなめとなる道徳の時間の在り方を見つめ直すため，「体験を生かした心に響く道徳の時間」を副主題としている。体験を生かした，道徳的価値の自覚を深める学習の在り方について，総合単元的な道徳学習の実践を中心として研究を進めていきたい。

（2）研究主題について

「豊かな心をもち，よりよい生き方を求める」とは

人間は，本来だれもが人間としてよりよく生きたいという願いをもっている。「自分の人生を自分らしく輝かせて生きたい」，「友達と共に手をとりあって生きたい」などの願いをもって生きている。そして，人間はその願いを実現しようとしている存在である。

こうした自己の願いをしっかりと見つめるとき，人間は，自己の存在が他者と深く結ばれていることを自覚し，より広い視野から自己の在り方を見つめ直すことになる。そして同時に，自分自身をかけがえのないものとしてとらえることにもなる。

よりよい生き方を求めて自己をしっかりと見つめ直すことで，人は自分なりの課題を見つけることができる。子どもが自分なりの課題を見つけたとき，この課題は，その子にとって自分自身を成長させ，願いを実現するための「自らの生きる課題」となる。

ところで，子どものもつ願いは，必ずしも「よりよい生き方を求める」ものばかりではない。他者のことを全く配慮せず，個人的な願いの達成ばかりを求める生き方などをすることもある。このような生き方は，たとえその子なりの満足感や喜びはあったとしても，よりよい生き方とはいえない。他者と共生しつつ自分らしく輝いて生きようとしてこそ，よりよい生き方だといえるのである。

ここで，「豊かな心」が重要となってくる。すべての子どもは，「豊かな心」の芽をもっている。この「豊かな心」の芽は，よりよい生き方を求める道徳学習によってさらに豊かなものとなると同時に，人や自然との豊かなかかわりによっても大きく育つ。また，豊かな心が大きく育つことによって，子どもの願いは，他者との結び付きを自覚した「よりよい生き方」を求める確かな願いとなる。

つまり，「豊かな心をもち，よりよい生き方を求める」ことによって，他者と共に生きる力や自律的に生きる力がはぐくまれ，その子らしい自己実現ができるのである。

豊かな心をもつ子どもをはぐくむために

「豊かな心」は，本来一方的な教育や強制で育てるものではない。さまざまなかかわりを豊かにもつことによってはぐくまれてくるものである。

しかし、今日の変動の激しい社会においては，子どもの心の調和的発達を阻害する要因が多い。そこで，子どもの実態に合わせ，学校・家庭・地域が連携して，意図的・計画的に体験を生かした道徳教育を進める必要がある。

『小学校学習指導要領解説道徳編』では，「生きる力」の核となる豊かな人間性は，次のような感性や心，道徳的価

値であるととらえられると，述べられている。本主題においては，これらの観点から「豊かな心」をとらえて研究を進めていきたい。

① 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
② 正義感や公正さを重んじる心
③ 生命を大切にし，人権を尊重する心などの基本的な倫理観
④ 他人を思いやる心や社会貢献の精神
⑤ 自立心，自己抑制力，責任感
⑥ 他者との共生や異質なものへの寛容

なお、「豊かな心」をもつ子どもをはぐくむためには，次の点に留意したい。

・ 多くの人々と交わり，心の交流を図る体験をもつことができるようにする。
・ 自然とのふれあいを通して命の大切さを実感したり，すぐれた芸術にふれたりする　ことができるようにする。
・ 道徳の時間をかなめとしながら人間としてどう生きるかを，体験を生かしつつ，しっかりと考えていくことができるようにする。

よりよい生き方を求める子どもをはぐくむために

子どもは「自分にも何かができる」，「自分は期待されている」と感じるとき，自分の直面する現実を素直に受けいれたり，他者と温かく交わったり，冒険したりすることができるようになる。だからこそ，教師や周りの大人には，目の前の子どもたち一人一人を，「より大きく成長したいという願いをもって，かけがえのない人生を生きている一個の人格」として受けとめ，その子の中に秘められた可能性を見いだし，その子の本当の思いを共感的に理解して勇気づけていくことのできる注意深さと心の柔軟さが必要である。

よりよい生き方を求める子どもをはぐくむために，「体験を生かした心に響く道徳学習」を行うが，その際，これまでも実践されてきている総合単元的な道徳学習は有効な方法である。総合単元的な道徳学習では，各教科・領域等における学習と道徳の時間の学習を有機的に関連させた学習や，課題追求的な学習を展開することができる。そのことによって，各教科・領域等の学びや体験をしっかりと生かした道徳学習を行うことができるのである。そこでは，子どもは重点とする内容項目を発展的に学習することができ，自分自身が成長していることを自覚することもできる。さらには，よりよい生き方を求めていきたいという意欲も高まってくる。

特に，「総合的な学習の時間」との関連を図った総合単元的な道徳学習は有効である。「総合的な学習の時間」は体験的な学習や問題解決的な学習を通して主体的な学びを発展させ，自己の生き方を考えることができるようにすることをねらいとした学習である。この学習には，道徳的価値が含まれることも多く，これまで以上に「体験を生かした心に響く道徳の時間」を展開することができるであろう。

こうした，体験を生かした道徳の時間の学習においては，子どもたちは道徳的な価値の大切さに気付くことができる。そして，自分自身への問いかけを深め，道徳的価値が自分のものとなるよう学びを発展させていくことができる。このような各内容項目にかかわる学習が，子ども自身の中で統合されていくことによって，子どもたち一人一人の人格の基盤となる道徳性を，計画的，発展的に育成することができるのである。

なお，よりよい生き方を求める子どもをはぐくむためには，次のことに配慮したい。

・ 子どもがよりよい生き方を求めていきたいと思うきっかけとなるような，心に響く体験や学習を設定することによって，課題意識をしっかりともつことができるようにする。
・ 道徳の時間の学習が，子どもがよりよい生き方を求めて考えを深めたり，行動したりする際のよりどころとなるようにする。
・ 子どもがよりよい生き方について考えたり，よりよい生き方を求めて行動したりすることができる場を設定し，子どもが成長を実感する機会をもてるようにする。

（3）副主題について

体験を生かすとは

子どもは、自分の直面する現実を自分自身の問題として切実に受け止めるほど，真剣に考えるものである。問題を自分で実際に解決しようとしてしっかりと考えるとき，自己と他者との関わりについて見直し，自己を表現し，自己を理解することができる。こうしたことができる豊かな体験こそが，たくましく生きる力を培っていくのである。

しかし，体験は必ずしもこうしたものばかりではない。体験をしても，その体験に含まれている道徳的価値に気付かないこともある。また，道徳的価値に気付いても，その気付きは個々の子どもにより多様である。ここに，体験を道徳の時間に生かす意味が生まれてくる。体験を生かす道徳の時間の学習を行うならば，子どもは体験をもとに自己を振り返ることができる。そして，道徳的価値の視点からしっかりと意味付けられたこの体験は，子どもの人格形成において，一層，意義深いものとなるのである。

さらに，体験の場は子どもが道徳の時間で学習したことを実践化できる貴重な機会でもある。子どもは実践することによって，さらにその意味を深くとらえたり，やり遂げた喜びを体感したりすることができるのである。

なお，体験を生かすことで，子どもたちは読み物資料を使った道徳の時間の学習には，一層具体的なイメージをもって考えることができるが，読み物資料と子どもの体験が類似していることが重要なのではない。体験によって生まれた子どもの課題意識が，本時のねらいとつながっているかどうかが重要である。

心に響く道徳の時間とは

道徳の時間の学習においては，道徳的価値そのもののすばらしさや道徳的価値を具現化しているものへの感動が起こったり，より高い道徳的価値への気付きや感動が起こったりすることがある。そして，自分自身とのかかわりを深める中で，より可能性を秘めた新たな自分と出会えた感動や自己の課題を明確にすることができた感動を，子どもたち一人一人が味わえることがある。このような道徳的価値の自覚を深めた道徳の時間は，「心に響く道徳の時間」であるといえる。

人間としての望ましい在り方や生き方を学習しても，それがなかなか実践できない自分や友達の姿を発見することがある。そのようなときに，どうすればよりよい生き方ができるのだろうかと互いに考え，励まし合って，共に生きる喜びを実感できたときにも，子どもは改善への意欲をもつことができ，「心に響く道徳の時間」となる。

また，今までよりも一歩進めた自分，人間として成長していく自分を自覚し，自分なりの思いや考えを表現し合える喜びや，思いや考えを共有することができる喜びなどを実感し，よりよい生き方をする自分への自信を深めたときにも，「心に響く道徳の時間」となる。

このような心に響く道徳の時間の学習が，さらに興味をもってより深く考えたり，新たな発見をしていこうとしたりする，よりよい生き方を求める子どもをはぐくむのである。

なお，道徳の時間の学習の深まりは，自分の心を開くこと，自由に考えを述べ，話し合うこと，自分を見つめることなどの程度と密接に結び付いている。学校，学級が温かい心の居場所となるようにすることはもちろん，そこで，じっくりと，子どもたちが心を通い合わせて，話し合ったり自己を見つめたりすることができるよう，学習活動を工夫することが大切である。また，日常生活や日々の授業においても，道徳的価値や道徳的事象に興味をもつことができるように働きかけることも，重要である。

３　研究内容

（1）子どもが主体的に取り組む総合単元的な道徳学習の在り方

・体験を豊かなものとして，道徳学習に生かす構想の工夫
・「総合的な学習の時間」の学習との関連の工夫
・子どもの課題意識を深め，広げる評価の在り方
・「心のノート」を位置付けた指導計画の在り方

（2）子どもの心に響き，道徳的価値の自覚を深める道徳の時間の在り方

・体験を生かして，個々の子どもの道徳的価値の自覚を促すための工夫
・各学年段階ごとの発達の特質に応じた指導の工夫
・心に響き，心が動く指導方法の工夫（発問，資料の活用，話し合いなどの工夫）
・よりよい生き方を求める子どもの思いをとらえ，生かしていく評価の在り方
・体験と道徳の時間を結ぶ「心のノート」の効果的な活用の在り方

（3）資料の開発と活用の工夫

・子どもの心を揺り動かす多様な読み物資料の選定・開発
・中心的な資料への興味や関心を喚起したり，具体的な生活での実践へとつなげていくための意欲付けを行ったりする副次的な資料の開発
・多様な視聴覚教材や情報通信ネットワークなどを利用した資料の開発
・体験的な活動や日常生活，教師の体験や願い，地域の文化や特性，保護者や地域の人々の生き方や願いなどから素材を見つけ，資料化するなど資料開発の工夫
・体験に含まれる道徳的価値に気付かせる「心のノート」の活用の在り方

（4）家庭・地域社会と連携し，学校ぐるみで道徳教育を進める工夫

・職員研修をどのように進め，課題解決をいかに図っていくか
・豊かな心をもつ子どもをはぐくむために，教師の個性を生かす指導体制の工夫
・家庭・地域社会との連携を進め，豊かな心をもつ子どもをはぐくむ工夫
・家庭・地域社会との連携を深める「心のノート」の活用の在り方

４　研究を進めるに当たっての留意点

○　学習指導要領においては，道徳の時間の目標として道徳的価値の自覚を深めることが明記されている。道徳的価値の自覚に関しては，道徳的価値についての理解を深めることができているか，自分とのかかわりで道徳的価値をとらえることができているか，道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われているか，という3つの事柄を押さえておく必要があることが示されている。道徳の時間の目的が本当に達成できているかどうかを十分に検討しつつ，研究を深めたい。

○　研究成果の検討には，確かな評価が不可欠である。よりよく生きようとする姿勢とはぐくまれつつある道徳性について，子ども一人一人に寄り添った評価を心がけたい。